

ジャン・バニエ略伝——上 浅野幸治

筆者は昨年九月にジャン・バニエの訳書『人間になる』を新教出版社から出しました。『人間になる』を読まれた方のなかには、「このバニエって、どういう人なのだろうか、どのような人生を送ってきた人なのだろうか」という興味をもたれた人も多いのではないのでしょうか。そのような関心に応えるために、筆者は力の及ぶ限りバニエの人生について調べて、以下の小文をまとめました。興味をもって読んでいただければ幸いです。

第一節 誕生と家族

ジャン・バニエ (Jean Vanier) は、一九二八年九月十日にスイスのジュネーブで、ジョルジュ・バニエ (Georges Philias Vanier) とポーリン・バニエ (Pauline Archer Vanier) の第四子として生まれました。父ジョルジュは一八八八年四月二三日、カナダのモントリオールに生まれ、母ポーリンは一八九八年三月二八日に同じくモントリオールで生まれ、二人は、ジョルジュが三三歳、ポーリンが二三歳の一九二一年九月二九日に結婚しました。

ジョルジュは、初め同地のロヨラ大学で教育を受け、ラヴァル大学モントリオール分校から法学士の学位を得たあと、法律家として働いていました。しかし、一九一四年に第一次世界大戦が勃発したあと、「おぞましい不正行為を正すため」にカナダの志願兵部隊「第二二大隊」（のちの第二二連隊）の創設に加わり、士官としてフランスに渡ります。そこでジョルジュは一九一八年、戦闘中に右足を失いました。大戦後はカナダに戻り、一九二一年の結婚後まもなく、第十二代カナダ総督ビング卿の副官に任命されます。そして副官の任期が終了した一九二三年から二年間、キャンベリー (Camberley) にあるイギリス陸軍幕僚養成大学 (British Army Staff College) に留学し、そのあと一九二五年に中佐に昇進して先の第二二連隊の隊長となります。また一九二八年からは、ジュネーブの国際連盟におけるカナダ代表団の軍事顧問として勤務しました。カナダ人であるジャン・バニエがスイスのジュネーブで生まれたのはこのときです。一九三一年、ジョルジュはロンドンにあるカナダ高等弁務局に転勤となり、一九三九年には駐フランス公使としてパリ

に赴きます。しかし、一九四〇年にナチス・ドイツ軍がフランスに侵攻してきたとき、ジョルジュはロンドンに逃れ、ついでカナダに戻りました。そこで一九四一年にジョルジュはケベック軍管区の司令官に任命され、翌一九四二年に少将に昇進し、一九四三年、亡命政府担当大使としてロンドンに赴き、一九四四年には駐フランス大使に就任しました。一九五三年に定年で大使職を辞したあと、ジョルジュはモントリオールに戻りましたが、一九五九年には第十九代カナダ総督に任命され、総督在任中の一九六七年三月五日に七八歳で亡くなりました。母ポーリンは、一九四〇年にロンドンで赤十字の活動に加わり、一九四四年、パリに戻った時にはカナダ赤十字の代表として、難民の救済に尽力しました。一九五三年、ポーリンは夫ジョルジュとともにカナダに帰国し、一九六七年に夫が亡くなったあと、モントリオールに戻りました。そして同年七月六日にポーリンはそれまでの人道的活動に対して「カナダ勲章 (Order of Canada)」を授与されます。また一九七二年からはフランスのトロローにあるラルシュの家に加わり、そこで一九九一年三月二三日、九二歳で亡くなりました。

ジャンの兄弟姉妹は上からテレーズ (Thérèse Vanier)、ベネディクト (Benedict Vanier)、ベルナル (Bernard Vanier)、そして弟のミシェル (Michel Vanier) です。姉テレーズは一九二三年生まれで、第二次世界大戦中、イギリス陸軍機動輸送部隊やカナダ陸軍婦人部隊に加わって自由フランス軍で働き、戦後はケンブリッジ大学そしてロンドンの聖トマス病院で医学を修めて、一九六六年に同病院臨床血液科の科長になりました。しかし一九七二年には同病院を辞してイギリスのカンタベリー近郊にあるケント・ラルシュの家の創設者の一人となり、一九七七年にはロンドンにあるランベス・ラルシュの家を創設しました。テレーズは同時に一九七二年から八八年まで非常勤でロンドンの聖クリストファー・ホスピスで医師としての仕事も続け、イギリスやフランス、ベルギー、スイス、フランス語圏カナダにおける緩和医療の発展に尽くしました。長兄のベネディクトは一九二五年の生まれで、モントリオールのロヨラ大学を卒業したあと、しばらくカナダ陸軍にいましたが、一九四七年に厳律シトー修道会に入って、神父になりました。次兄のベルナルは一九二七年生まれで、パリの大学で政治学を勉強した後、画家になりました。最後に、弟のミシェルは一九四一年の生まれで、モントリオールのラヴァール大学から政治学で修士号を得たあと、同地の短期大学 (CEGEP) で政治学の教授になりました。

第二節 青少年期——一九五〇年まで

既に述べたジョルジュの経歴から分かるように、ジュネーブで生まれたジャン・バニエ（以下、単にバニエと表記）は、主にロンドンとパリで少年期を過ごしました。バニエにとって人生の転機が訪れるのは、一九四二年のことです。そのときのことをバニエは次のように語っています。

私の人生でとても大切な出来事を思い出します。戦争中の一九四二年、十三歳で自分が海軍に入ろうと思ったとき、もちろん私は、父と相談する必要がありました。それは特に微妙で難しい相談でした——私たちはカナダにいて、英国海軍の兵学校はイギリスにあったので、大西洋を渡る必要がありました。当時、連合国の船の三隻に一隻がドイツの潜水艦によって沈められていたからです。父の執務室など行ったことがないので、少し怖かったことを覚えています。中に入ると、父は大きな安楽椅子を示して、座るようにと言いました。あのような巨大な安楽椅子は、今はめったにお目にかかりません。たぶんその時の自分にとって、それがあまりに巨大に見えたのでしょう。「何をしたいのか、なぜそうなのか、よく話しなさい」と、父は私に耳を傾けてくれました。自分が何と言ったかはよく覚えていませんが、父がいった言葉は覚えています——「おまえを信頼するよ」と言ってくれました。「もしそれがおまえのしたいことなら、それをしなければならぬ。」このときの父の言葉が私を生かしてくれたということは、ずっと後で分かりました。もし父が「ちょっと待て。もう数年すれば、カナダ海軍の学校に入れるだろう」と言っていたならば、私はその通りにしていたでしょう。しかしその場合には、私は自分の直観的判断力に信頼を失っていたでしょう。父が私に「おまえを信頼するよ」と言ってくれたので、私も自分を信頼できました——そのおかげで私は、自分の課題に全力で取り組むことができたのです¹。

当時、バニエは十三歳でした²。生死に関わる問題について十三歳の少年を父親が信頼するとは、どういうことでしょうか。バニエの判断に父のジョルジュが賛同し

たという意味ではありません。ジョルジュは、バニエが海軍兵学校に行くべきだと考えたわけではありません。もちろん、行くべきでないと考えたのでもありません。

「もしそれがおまえのしたいことなら、それをしなければならぬ」というジョルジュの言葉は、「それ」の内容が何であっても当てはまります。言わば白紙の委任状を与えているのです。それが、「おまえを信頼する」ということの意味です。つまり、バニエの生き方に関して、父が判断するのではなくて、バニエ自身が判断すれば十分であると認めてくれているのです。

かくしてバニエは、一九四二年にイギリスのダートマスにある海軍兵学校に入学します。第二次世界大戦中に起きたことでは、バニエは二つのことを忘れることができないと述べています。

一つは、一九四五年十二月に、当時駐フランス大使だった父を訪ねて私がパリにいた時のことです。ブーヘンヴァルトやベルゲン＝ベルゼン、ダッハウといったドイツの強制収容所から帰ってくる人々をこの目で見ました。青と白の縞模様の囚人服を着た男女の群れでした。皆、骸骨のように痩せ、目がくぼんでいました。その光景は、今も私の脳裡に焼きついて離れません——人間が他の人間に対して何をすることができるものなのか、私たちがどのようにお互いを傷つけ殺し合うことができるものなのか³。

バニエに先立って、父ジョルジュが一九四五年の四月に、アメリカの議員団とともに、解放されてから一週間後のブーヘンヴァルト強制収容所を訪れています。ですからバニエは、解放直後の強制収容所の様子についても父から聞いていたでしょう。

もう一つは、一九四五年八月六日と八月九日に広島と長崎で起きたことです。私は、その原子爆弾の落ちた日のことを忘れることができません。今日、世界の強国は何万発も核弾頭を持っています。このような人類を見て、イエスは泣いておられると思います⁴。

そして大戦後の一九四六年にバニエは、海軍兵学校を卒業して、戦艦ヴァンガードに士官として乗船しました。一九四八年にはカナダ海軍に移って航空母艦マグニ

フィセントの乗員となりました。このときバニエは大尉にまでなっていました。しかし一九五〇年にバニエは海軍を去ります。そのころの心境について、バニエは次のように語っています。

海軍を辞めたのは、徐々に気持ちが変わって、愛を求めるようになったから——戦争やその準備以上の何かがあると思うようになって、少しずつ（海軍から）気持ちが離れていったからです。一九五〇年のことですが、私は若い海軍士官で、私が乗っていた航空母艦がハバナに行きました。それはフィデル・カストロが未だいないときで、仲間の士官たちは皆、ダンスに出かけました。しかし私はといえば、無我夢中で教会に行きました——私は、何か別のもの、つまり自分の人生のために新しい意味を探し求めていたからです。ですから、それは突然の大回心といったものではありません。徐々に、単なる戦争準備とか機械や効率、能力や命令よりも、もっと深い何かがあると思うようになったのです。何か別のものです——自分自身にも関わるものだったと思います。おそらくそれは、自分自身に立ち返りたい、そして自分自身の中で一番大事な部分、つまり自分の本心を見つけ出したいという欲求だったのでしょう⁵。

海軍を去った理由について別の所では次のようにも述べています。

平和と自由のために別の働き方をしよう促されている、精神を深め、神の御心からあふれる愛をとおして、争いの原因とその解決方法を理解することが求められている、と感じたためです⁶。

第三節 青年期——一九六四年まで

海軍を辞めたあと、バニエはトマ神父 (Père Thomas Philippe) と出会います。トマ神父は、バニエの思想形成にとっても人生にとっても決定的な影響を与えることになる人物なので、ここで簡単に紹介しておきます。トマ・フィリップは、一九〇五年三月二八日にフランスのリール近くのシソワン (Cysoing) で生まれました。一九二三年十一月二一日にドミニコ会に入り、一九二九年七月二五日に司祭

に叙階されました。神学の学位を得たあと、トマ神父は、パリのソールシュワル (Saulchoir) 学院およびローマのアンジェリカム (Angelicum) 別名聖トマス・アクイナス大学で神学を教え、一九四一年にはソールシュワル学院の学院長になりました。また第二次世界大戦後の一九四六年には、パリの近くで様々な国の学生たちと「活ける水 (L'eau vive)」という共同体を始めて、神学と霊性の指導にあたりました。しかし一九五〇年にバニエが「活ける水」にやってきて間もなく、トマ神父は健康上の理由からその共同体の指導ができなくなりました。その後一九六三年の秋に、トマ神父は、パリ北郊のトロローリー・ブルーユ (Trosly-Breuil) 村にある知的障害者の施設「花咲き溪谷 (Val Fleuri)」の司祭になりました。そして同地でバニエが一九六四年八月にラルシュを始めてから、トマ神父はラルシュの司祭にもなりました。一九七一年には、同じ村内にラルシュの一部として「畑 (La Ferme)」という名の祈りと黙想の家を開設しました。トマ神父は、一九九三年二月四日に八七歳で亡くなり、「畑」の小聖堂の横で眠っています。

さて、トマ神父に会ったバニエは、トマ神父から「活ける水」に来ないかと誘われて、その共同体に加わります。そして哲学と神学の勉強を始めました。しかし、既に述べたように、まもなくトマ神父が健康上の理由で共同体の指導をできなくなり、バニエが代わって指導的役割を果たすことになりました。それから数年間「活ける水」にいたあと、バニエはそこを離れて⁷、ロアール地方アンジェ (Angers) の近くにあるベルフォンテーヌ (Bellefontaine) 修道院で一年、さらに農場で一年とポルトガルのファティマ (Fatima) で二年を過ごしました。そして一九六二年、アリストテレスの倫理学について博士論文を完成させたバニエは、パリ・カトリック大学 (Institut Catholique de Paris) から哲学博士号を取得します。論文の題目は「幸福——アリストテレス倫理学の原理と目的 (Le Bonheur: Principe et fin de la morale aristotélicienne)」というものでした。この時期のことを振り返ってバニエは、「自分は平和とキリスト的生き方という理念に全身全霊を捧げたい、そして哲学、神学を学びたいと思っていた」と述べています⁸。

博士となったバニエは、翌一九六三年にトロント大学の聖マイケル・カレッジ (St. Michael's College) に職を得ます。そこでバニエは道徳哲学を教えていました。

そのときに、バニエの人生にとって一番大きな転機が訪れます。同じ年の秋にトマ神父は「花咲き溪谷」の司祭になっていました。そのトマ神父から、バニエは、

「新しい友だち」ができたから会いにこないか、という誘いを受けたのです。そのときの動揺について、バニエは次のように語っています。

私はトマ神父の誘いに「行きます」と一応答えましたが、内心は非常に心配でした。話すことのできない人たちと、どうやって心を通わしたらいいのだろうか。もし話すことができたとしても、いったい何について話をしたらいいのだろうか。この状況に自分がうまく対処できない、つまりどうしたらいいか分からないこと、そして自分の力が十分でないことが恐かったのです⁹。

そのような不安を抱きつつも、バニエは秋学期が終わったあと、クリスマス頃にトマ神父のもとを訪ねて、知的障害をもった人たちと出会いました。そして深く心を動かされます。そのときの衝撃をバニエは次のように述べています。

私は少し緊張し不安な気持ちをもって、これらの弱くて無力な人たちに出会いました。彼らは、事故や病気によって傷つけられていたのですが、それ以上に、自分たちが出会った蔑視と拒絶によって傷ついていました。彼らに出会って、私は深く心を動かされました。彼らは皆、友情と愛情に飢えているように思われました——皆が私にしがみついて、言葉や眼差しで「僕のこと、好き？ 友だちになってくれる？」と聞いてきました。

そして皆が、障害のある傷ついた身体全体で、「どうして？ どうして僕はこんなふうなの？ どうしてお父さんやお母さんは僕と一緒にいてくれないの？ どうして僕は、お兄ちゃんやお姉ちゃんのように生きられないの？」と尋ねてきたのです¹⁰。

そのときにバニエはトマ神父からある重要な言葉をもらいました——ひょっとしたら、知的障害をもつ人たちのために「なにか」を始められるのではないか。

年が明けた一九六四年一月、バニエはトロントに帰って、もう一学期のあいだ聖マイケル・カレッジで教えます。しかし、大学で教えることは依然として楽しいものの、バニエはもはやそこが自分のいるべき場所だとは感じていませんでした。そして学期が終わったあと、バニエはフランスに戻ります。

注

- 1 この引用は、『心貧しき者の幸い』八〇～八一頁および『*Toute personne est une histoire sacrée*』一一四～一一五頁の記述を適当に合わせたものである。その際、『心貧しき者の幸い』からの引用については、鳩の会訳を一部変えたところがある。
- 2 『心貧しき者の幸い』八〇頁には「十二歳」と記されている。しかし、一九二八年九月十日生まれのバニエは一九四一年九月十日で満十三歳になるので、一九四二年の出来事であれば、バニエは十三歳であろう。ただし、文献によっては、バニエがイギリス海軍に入ったのが一九四一年であるとするものもある（『*Contemporary Authors*』）。しかし、バニエ自身が、十三歳で海軍に入ったと言い（『人間になる』一二二頁）、父との相談が一九四二年だったと書いている（『心貧しき者の幸い』八〇頁、『*Toute personne est une histoire sacrée*』一一四頁）し、『*One Woman's Journey*』一〇三頁でもバニエが一九四二年の春学期に海軍兵学校に入学したと述べられているので、『*Contemporary Authors*』の記述は不正確なのであろう。つまり結論としては、一九四二年の一月一日から春までの間に、バニエは父と相談し、イギリスの海軍兵学校に出願し入学したということになる。
- 3 この引用は、『心貧しき者の幸い』十七頁および『*National Catholic Reporter*』の記事を適当に合わせたものである。なお、この経験の時期については、『心貧しき者の幸い』十七頁は「一九四五年の十二月、パリ解放の数ヶ月後」と言い、『*National Catholic Reporter*』の記事は「一九四五年一月」と言う。しかし、一九四五年一月にはブーヘンヴァルト以下の収容所は未だ解放されていないので、『心貧しき者の幸い』十七頁にある「一九四五年十二月」という年月のほうが正しいと考えられる。他方で、「一九四五年十二月」という時期が正しいとすると、『心貧しき者の幸い』の記述とは違って、それはもはや「パリ解放の数ヶ月後」とは言えない。パリは一九四四年八月に解放されているので、「一九四五年十二月」は一年以上後である。
- 4 『心貧しき者の幸い』十七頁。
- 5 「Interview with Jean Vanier」
- 6 『暴力とゆるし』九頁。
- 7 トマ神父が「活ける水」を離れたのが一九五二年で、バニエがそこで指導的役割を果たしたのが六年間だとすると、バニエは一九五八年に「活ける水」を離れたことになる。しかしもしバニエが指導的役割を果たしたのが四年間だとすると、バニエは一九五六年に「活ける水」を離れたことになる。
- 8 『*Toute personne est une histoire sacrée*』八三頁。
- 9 『人間になる』一〇六頁。
- 10 『*Toute personne est une histoire sacrée*』七頁。

参考文献

- Allen, John L. "L'Arche founder reveals face of Christ: Jean Vanier offers mix of love, community to the suffering." *National Catholic Reporter* (Nov. 1, 2002): 14.
- Allon, Bernard. "Jean Vanier and L'Arche." *Spirituality* (May-June 2000).
- L'Arche UK. *L'Arche UK Newsletter* (Issue 56, 2003).
- Becquart, Philippe. "Développement moral et vie théologique selon le P. Thomas Philippe." http://www.unifr.ch/tmf/article.php3?id_article=73
- Cowley, Deborah & George. *One Woman's Journey: A Portrait of Pauline Vanier*. Ottawa: Novalis, 2000.
- Downey, Michael. *A Blessed Weakness: The Spirit of Jean Vanier and L'Arche*. San Francisco: Harper & Row, 1986.
- . "Jean Vanier: Recovering the Heart." *Spirituality Today* 38 (Winter 1986): 337-38.
- Gale Group. *Contemporary Authors: Biography - Vanier, Jean (1928-)* [HTML]. Thomson Gale, 2004.
- The Office of the Secretary to the Governor General of Canada. "Major General The Right Honourable Georges Philias Vanier." http://www.gg.ca/gg/fgg/bios/01/vanier_e.asp
- Philippe, Thomas. *The Contemplative Life*. Translated by Carmine Buonaiuto. New York: Crossroad, 1990.
- Vanier, Jean. *In Weakness, Strength: The Spiritual Sources of George P. Vanier, 19th Governor-general of Canada*. Toronto: Griffin House, 1969.
- . *Toute personne est une histoire sacrée*. Paris: Librairie Plon, 1994.
- . "Interview with Jean Vanier." *30 Good Minutes* (Feb.24, 2002).
- Vanier, Thérèse. *One Bread, One Body: The Ecumenical Experience of L'Arche*. Ottawa: Novalis, 1997.

- ジャン・バニエ、『心貧しき者の幸い』鳩の会訳、あめんどう、1996年。
- 、『暴力とゆるし』原田葉子訳、女子パウロ会、2005年。
- 、『人間になる』浅野幸治訳、新教出版社、2005年。

(あさの・こうじ 豊田工業大学助教授)

ジャン・バニエ略伝——下 浅野幸治

第四節 ラルシュ時代——一九六四年から

フランスに戻って、トマ神父からやはり、「なにか」を始められるのではないか、という言葉をもたらしたバニエは、決意を固めます。そのときのことをバニエは次のように述べています。

自分がなにかを始めることがイエスの御心であるということは明白なように思われました。私は、今でもそうですが、まったく単純な人間でしたから、あまり多くのことを考えませんでした。私の手は空いていて、その手を差し出すことができました——そして私はイエスに従い、福音の道を実践することを望んでいました。ですから、トマ神父と、それから「花咲き溪谷」の理事長をしていた精神科医のプレオー博士から励まされたとき、私は「なにか」を始めようと決心したのです¹。

このように決意したバニエは、まず精神病院や施設などを見学してまわり、知的障害者の親御さんたちにも会って話を聞きました。

その頃バニエは、自分の十三歳のときの経験と好対照をなす、もう一つの経験をします。その経験についてバニエは次のように書いています。

私は、知的障害をもった人たちのいる様々な所を訪ねるようになりました。そして自分が見たものに、特にパリの南にある施設で目にした光景に完全に圧倒されました。巨大な壁が、コンクリート・ブロック製の建物を取り囲んでいました——そして八十人の男性が、そこで仕事もなく寮生活をしていました。一日中、彼らはただぞろぞろと歩き回っていました。午後の二時から四時までは強制的な昼寝の時間で、それからまた全員で歩き回るのでした²。

この知的障害者たちは、寮生活の中で、自分が何をするか（生活の仕方）を他人に

よって決められていました。その意味で、自分の人生を生きていなかったのです。仕事もなく、人生の目的もありませんでした。それを象徴するのが、コンクリート・ブロック製の建物であり、巨大な壁です。

右の引用で語られる施設で、バニエは、ラファエル・シミ (Raphaël Simi) とフィリップ・スー (Philippe Seux) に出会いました。ラルシュ (L'Arche) の創設者と考えられているのは、バニエとトマ神父とラファエルとフィリップの四人なので、ここでラファエルとフィリップについても簡単に紹介しておきます。ラファエルは、一九二八年に南仏のマルセイユで生まれました。一九三一年に家族と共にパリの南に引っ越して、そこで育ちます。しかし、子供のときに小児麻痺（髄膜炎）にかかり、さらに神経病を患った結果、半身不随になりました。一九六二年に母親が亡くなったとき、ラファエルは前記の施設に入れられました。

フィリップは、一九四一年五月二日にモロッコのカサブランカで生まれました。しかし二歳のときに、百日咳と脳炎にかかって、その後遺症で片足と片腕が不自由になりました。六歳の時から母親と二人で暮らしていました。一九六一年に母親が病気になり、その治療のために、二人はフランスに来ました。しかし、その母親は入院したまま一九六三年に亡くなってしまいました。フィリップも病院に入れられ、それから前記の施設に入れられました。ここまでが、ラファエルとフィリップの、バニエに出会うまでの半生です。

バニエは次に、両親と友人の協力を得て、トローリー・ブルーユ村に一軒の古びた家を買いました。そしてバニエに誘われて、ラファエルとフィリップは、一九六四年八月四日からその家でバニエと共同生活を始めました³。これがラルシュの誕生です。フィリップは、その当時のことを振り返って次のように述べています。

僕がジャン・バニエと最初に会ったのは、施設の中でした——そこから僕たちは出られませんでした。ジャンは小聖堂にいたのです——それからスープを配ってくれました。僕は最初から強い印象を受けました。ジャンの前の机が、すごく小さく見えました——それほどジャンは大きかったです。それから、僕がラルシュに来たときは、電気も何もありませんでした。だから、ろうそくの火を灯しました——本当におかしかったです。便所もなければシャワーもありませんでした。僕はもうパンクしちゃいました。だけど、「ヤッター」という感じでした——それくらい幸せでした。

その前は、僕にとって生きてるって感じがなかったです——一日中部屋の中で座っているだけでした。施設では、なにもできなくて、外にも行けなくて、ものすごく退屈でした——することがまったくなにもなかったのです。泣けてきました。全然よくありませんでした。だけど、ラルシュに来てから、少しずつよくなってきました。できるところから、いろいろなことをし始めました。一緒に料理をして、食事の準備を手伝ったりしたのです⁴。

ラファエルは、そのあと一九七五年に、より静かな生活を求めて、ソンム県のベルピレール (Verpilleres) に新しくできたラルシュ「風のぼら (La Rose des Vents)」に移りました。六十歳で引退したあとも様々な仕事をしていましたが、二〇〇三年になって健康状態が悪くなり、肺炎を患って三月二三日に亡くなりました。フィリップは、一九七五年にコンピエーニュ (Compiègne) の街に新たに作られた「イズバの家 (Isba)」に移り、現在もそこで暮らしています。

実を言えば、一九六四年八月四日の時点ではまだ、バニエとラファエルとフィリップの住む家に名前はありませんでした。しかしまもなく、「ラルシュ (L'Arche)」という名前が付けられます。「ラルシュ」と片仮名で言う見えなくなりますが、L'Archeとは、箱舟を意味します——ノアの箱舟です。ですから、それは、現代社会で溺れないで生きていける場所を意味すると同時に、神と人との新しい契約、つまり未来における人間の新しい生き方を象徴しています。

このようにしてラルシュは船出をしました。そのラルシュを特徴付けるものは、生活の簡素さと貧しさでした。既にフィリップが語ってくれたように、ラルシュの家には電気もなければ、便所もシャワーもありませんでした。家具は人からもらったり借りたり、中古品を買ったりしていましたが、食料もいろいろな人から分けってもらいました。その中で、バニエとラファエルとフィリップは、一緒に家の修繕や農作業をし、食事をして、遊んだり、くつろいだり、お祈りをしたりしました。おそらく、生活が簡素であれば、夾雑物から解放されて生活そのものが見えるようになるのでしょう。そして人間生活の本質を見れば、そこには何か神々しさが感じられます。と同時に、余計なことをしないので、十分に神と向き合うこともできます。

バニエは既に、精神病院や施設を訪ねていたときに、知的障害をもつ人たちの霊

性に気付いていました。バニエは、前記の、ラファエルとフィリップがいた施設を訪ねたときの経験について次のように述べています。

そこで私は、人々の叫び声や全体の悲しい雰囲気衝撃を受けただけでなく、神がなにか不思議な仕方でそこにおられることにも強く心を打たれました⁵。

ここで私たちは、バニエがよく引用する『聖書』の言葉を思い起こすべきでしょう。

わたしの名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしではなくて、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。（マルコ9・37）

お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。（マタイ25・35～36）

つまり、知的障害をもつ人たちの中からイエスが呼びかけているのであり、バニエはそれに気付いたのです。

さてラファエルとフィリップと暮らし始めた当初、バニエは、海軍士官のように、自分が彼らに何をするかを指示するものと思っていました。例えば、バニエの考えでは、毎朝皆が起きて七時のミサに行くことは当然のことでした。しかしそれは、ラファエルやフィリップの望むところではありませんでした。そのような経験を通してバニエは少しずつ、自分がラファエルやフィリップに十分に耳を傾けていないことに気付かされました。そして、ラファエルやフィリップにはそれぞれの人生があり、それぞれ独自の望みや思いがあるということ、したがって彼らの自由をもっと大切にして彼らが自分で物事を選択できるようにする必要があるということが分かってきました。

バニエとラファエルとフィリップが共に暮らすなかで、友情が深まりました。バニエは、ラファエルとフィリップの心の痛みや傷の大きさが分かってくると同時に、彼らの心の美しさや優しさ、そしてとりわけ彼らが人と真に人間的に関わり合

うことのできる心の人であることにも気が付きました。バニエは、ラファエルとフィリップとの生活を通して自分自身が変わりつつあること、自分の心が成長を始めたことにも気が付きました。ラファエルとフィリップになにかを教えてあげようと思っていたバニエが、実は彼らから多くのことを学んでいたのです。こうしてラルシュは、知的障害をもった人たちからバニエが愛について、心の道について学ぶ学舎となります。

そこでバニエが学んだ内容については別稿に譲ることにして、ここではバニエの現在までの伝記的記述を続けます。一九六四年十二月の末に、バニエは、プレオー博士らから翌年五月二二日付けで「花咲き溪谷」の施設長を引き受けてほしいと頼まれます。バニエは仰天しましたが、トマ神父からも励まされて、その依頼を引き受けます。こうして一九六五年五月二二日、バニエが施設長となることによって、「花咲き溪谷」がラルシュの二番目の家になりました。一九六六年には三番目の家「小枝 (Les Rameaux)」を、一九六八年には四番目の家「庵 (L'Ermitage)」を開設しました。このようにラルシュは急速に発展していき、現在ラルシュ・トローリー⁶には九軒の家があります。またラルシュはトローリーにとどまらず、フランスの内外に大きく広がっていきます。一九六九年、トロント近郊のリッチモンド・ヒルにラルシュ「あけぼの (Daybreak)」が開設され、翌一九七〇年にはフランス国内シャラント県のクービヤック (Courbillac) にラルシュ「慈しみ (La Merci)」と、インドのバンガロールにラルシュ「希望の家 (Asha Niketan)」が作られました。こうして現在 (二〇〇五年十一月) では、フランスやカナダ、イギリス、アメリカ合衆国を始め、日本を含む世界31カ国に一二九のラルシュの家 (L'Arche) が作られています。

一九六八年、バニエは、マリーエレン・マッシュュー (Marie-Hélène Mathieu) に出会います。マッシュューは、パリでキリスト教障害者センター (Office Chrétien des Personnes Handicapées) を作って活動している人でした。その当時、知的障害者は、巡礼をしても意味がないし、それどころか他の巡礼者の迷惑になると考えられていました。しかし、知的障害児のご両親の強い希望に心を動かされて、バニエとマッシュューは、知的障害をもった人たちもなんとか巡礼に行けないものかと考えました。そして三年の準備期間を経て、遂に一九七一年の復活祭のとき、ルルド (Lourdes) への巡礼を行いました。それは、15カ国から四千人の知的障害者と八千人の家族や友人、総勢一万二千人が参加する大きな巡礼になりました。その巡

礼をきっかけとして、「信仰と光 (Foi et Lumière)」が生まれました。「信仰と光」とは、地域ごとに十五人～四十五人くらいで作られていて、知的障害をもった人とその家族、友人が定期的集まって、お祈りをし、喜びを分かち合い、話し合い、愛を深め、支え合っていくための集まりです。ラルシュと「信仰と光」は、知的障害をもった人たちを中心としている点で同じです。けれども、ラルシュの中心には、知的障害をもった人たちともたない人たちとの共同生活があるのに対して、「信仰と光」のほうは、そのような共同生活を送っているのではない場合に、知的障害をもった人たちとその家族、友人が支え合って生きていくための集まりです。

「信仰と光」は現在（二〇〇六年一月）、日本国内に10カ所、世界には日本を含め77カ国の一四六二カ所に作られています。

バニエはまた、前記「希望の家」との関係で一九六九年からインドに行くようになり、発展途上国の貧困を目の当たりにしました。一九七三年からはカナダの刑務所で講演や黙想会をするようになり、非行や犯罪についても知るようになりました。これらの経験を通して、バニエは福音の教えについて視野を広げていきます。

一九七八年、ラルシュ・トロリーは、新たに「森の家 (La Forestière)」を開設して、重度の知的障害をもつ人たちを迎え入れました。そしてバニエは、一九八〇年にラルシュ・トロリーの責任者の地位から退き、「森の家」で一年を過ごします。それまでは、重度というよりはむしろ軽度の障害をもった人たちと暮らしてきたわけですが、重度の知的障害をもつ人たちとの生活はバニエに、これら知的には極めて乏しい人たちが心の点ではとてつもなく豊かであることを教えてくれました。またその人たちとの生活の難しさは、バニエに自分自身の乏しさをも分からせてくれました。こうしてバニエは、他人の乏しさを受け入れるには、まず自分自身の乏しさを受け入れる必要があるということを知りました。

一九八六年十二月、バニエはカナダ勲章 (Order of Canada) を授与されました。

翌一九八七年の六月、バニエは日本を訪れて、神戸市郊外にある関西地区大学セミナーハウスで黙想会を行いました。そのときの講話は『心貧しき者の幸い』として出版されています。バニエはまた、一九九二年一月と一九九八年九月にも来日して、静岡県で黙想会を行っています。

二〇〇六年二月現在、バニエは既に七七歳ですが、健在であり、黙想会の指導などを活発に行っています。

注

- 1 『An Ark for the Poor』 十六頁。
- 2 『An Ark for the Poor』 十六頁。同様の記述は、『*Toute personne est une histoire sacrée*』 八頁にもある。
- 3 正確を期すと、一九六四年八月四日、ラファエルとフィリップの他に、同じ施設からもう一人ダニー (Dany) という知的障害者もラルシュの家にやってきた。しかし残念なことに、ダニーは二日とそこに留まることができなかった (『An Ark for the Poor』 十七～十八頁)。
- 4 Maurice. “Philippe Seux.”
- 5 『An Ark for the Poor』 十六頁。
- 6 これは、「ジャン・バニエ略伝——上」の第一節に出てきた「トローリーにあるラルシュの家」と同じものである。

参考文献

Durner, Danielle. “Raphaël Simi.”

<http://www.larchecanada.org/rsimi2.htm>

Maurice, Antoinette. “Philippe Seux.”

<http://www.larchecanada.org/pseux2.htm>

Thomas, Helen R. *L'Arche: Ecumenical Communities for People with Learning Disabilities*. London: Catholic Truth Society, 2002.

Vanier, Jean. *Toute personne est une histoire sacrée*. Paris: Librairie Plon, 1994.

———. *An Ark for the Poor: The Story of L'Arche*. New York: Crossroad, 1995.

浅野幸治、「ジャン・バニエ略伝——上」、新教出版社『福音と世界』二〇〇六年五月号、五九～六六頁。

ジャン・バニエ、『心貧しき者の幸い』鳩の会訳、あめんどう、一九九六年。

(あさの・こうじ 豊田工業大学助教授)

(付記 本略伝は、新教出版社『福音と世界』2006年5月号59～66頁、6月号56～61頁で発表したものである。)